

# 「主義」の流布と中国的受容

社会主義・共産主義・帝国主義を中心に

陳 力 衛

## 1. 日本における「主義」の対訳

斎藤毅の「主義という重宝なことばの誕生」によれば<sup>1)</sup>、「主義」は日本語においてもともと単独として Principle の訳語に使われていて、「原理原則」の意味を表していた<sup>2)</sup>、後になって接尾語の -ism の訳語に対応させたことで広く一般に使われるようになったという。

事実、「～主義」とともに、「～教、～論、～学、～説」の訳も同時代によく見かけられたし、初期では中国英華字典に訳された「～道、～理」もあった。接尾語としての「～主義」が早くも、明治十年の『東京日々新聞』第 1778 号（1877 年 11 月 2 日）に、

的ヲ定メ干涉主義ニ由リテ官権ヲ以テ蠶種ノ製造ヲ制限スル乎或ハ  
自由主義ニ由リ一切コレニ干涉セズシテ蠶種商農ノ自滅ニ任スル乎  
のように「干涉主義」「自由主義」の語が見られた。『哲学字彙』（1881）に至っても、

Altruism 利他主義

Egoism 自利主義

Egoistic altruism 兼愛主義

Federalism 聯邦主義

のように、「～主義」との組み合わせが訳語として出てくる。国立国語研

---

1) 『明治のことば』講談社、1978

2) Principle 道, 原理, 主義。『哲学字彙』, 1881

究所の近代雑誌コーパスで「主義」を確認してみると、明治大正期の1874～1925年にわたって、単独使用の「主義」と接尾語としての「～主義」と合わせて9千余りの出現回数に達した。その中の1887～88年の『国民之友』には、「主義」と結合した下記の語、

自由～、民主～、共和～、社会～、保守～、改進黨～、平民～、貴族～、  
愛國～、平等～、国家～、博愛～

などが使われている。近代国語辞典の嚆矢とされる『言海』（1889）では「主義」を「論ノ旨ト立ツル所。説ノモトダテ」と解釈されている。後に、『大言海』や『日本国語大辞典』などにも多く収録され、『広辞苑』第六版（2008）には下記のような語種別で335語もの「～主義」が収録されるようになった。そのうち、和語や外来語や混種語の主義が少なく、全部で36語で、残りは漢語の主義がほとんどであった。

和語：事勿れ主義、詰込み主義、草の根民主主義

漢語：愛他主義、利他主義、意思主義、表示主義、一物一権主義、一  
国社会主義、印象主義、後期印象主義、英雄主義、営利主義、  
厭世主義、欧化主義、応報刑主義...

実用主義、実利主義、児童中心主義、資本主義、自民族中心主義、  
社会改良主義、社会構成主義、社会主義、社会民主主義、  
写実主義、主意主義、重金主義、集産主義、自由主義、重商主義、  
自由心証主義、修正資本主義、修正主義、自由相続主義...

外来語：アジア主義、アラブ民族主義、アリストテレス主義、イスラ  
ム原理主義、エピクロス主義、カルヴァン主義、カント主義、  
キリスト教社会主義、ギルド社会主義、スターリン主義、スト  
ア主義、スピノザ主義、スラヴ主義、セクター主義、セクト主  
義、マッハ主義、マルクス主義、マルクスレーニン主義、マル  
サス主義、モンタノス主義、モンロー主義、ユーラシア主義、  
レーニン主義、ロマン主義

## 「主義」の流布と中国的受容

混種語：新マルサス主義，汎アジア主義，汎アラブ主義，汎イスラム主義，汎ゲルマン主義，汎スラヴ主義，反ユダヤ主義，ポスト構造主義，労働組合主義

こうした個々の主義の成立史をたどることは、近代以来日本でどのように西洋由来の新思潮を受け入れてきたか、または、近代知の伝播として日本から中国へどのように伝わって行ったかも跡付けることになるから、本稿ではもっとも近代思想を反映させる三つの重要概念に絞ってその成立の過程から受容・伝播のプロセスまで眺めていこうと思う。

## 2. 「社会」の成立

### 2.1 「仲間」から「社会」へ

「社会」という語は早くも「郷民為社会」と、中国の朱子学の入門書『近思録』(1176)に見られ、「聚会」の意に用いられている、時代が下って明の万暦十三年の『世説新語補』(1585)にも「王叔治七歳喪母，母以社日亡，来歳隣里修社会。」とあり、ここでの「社会」も同郷や隣同士の会合などの意を表している。十九世紀に至っても、アメリカ人宣教師のブリッジマン（裨理哲）の著した『地球説略』(1856)にもその意が受け継がれていた。

各穿文繡衣服，持之周行於路，以為美觀。宛如中国社会一般，西洋教，回回教猶太教則間有之。（歐羅巴大洲図説）

したがって、中国語においてこの語は限られた意味で使われ、使用頻度も低いが、上記の三書がともに日本に伝わっていたことから、日本でも一応その形態に接することが可能である。特に『地球説略』は近代の漢訳洋書として箕作阮甫によって加點され、万延元年（1860）に翻刻出版されたもので、その中で「社会」二字を連語符で繋げ一つの独立した語として処理していたので、その認定が後の「社会」が西洋概念への対訳に使われる決定的な役割を果たしたと思われる。

江戸時代の日本にも「社会」という語が見られる、たとえば江村北海

(1713-1788)の『日本詩史』(1771)巻三には「以故社会綿綿二十有余年」とあるが、これは中国語本来の意の援用であった。十九世紀の初めになって、青地林宗が『輿地誌略』(1826)を翻訳する際に「社会」をもってオランダ語「kloofter(男子修道院)」に対訳しはじめ、小規模の共同体を指すようになった<sup>3)</sup>。

ただし、日本最初の英和辞典『英和対訳袖珍辞書』(1862)には society を「仲間」と訳しただけで「社会」を使っていない。明治初期の翻訳作品においても、たとえば明治五年(1872)瓜生三寅訳『合衆国政治小学』には、

人間の交際を英語にソサイテイといふ

はっきりと「交際」を英語では society という。同年の中村正直訳の『自由之理』(On Liberty)には「寄り合ヒテソサイテイ「仲間/会社」トナレバ」と、音訳語のソサイテイを「仲間」或いは「会社」と訳していた。そしてこの「会社」が初期の漢語辞典『漢語字類』(1869)には、「ヨリアヒナカマ」と解釈され、今日によく見られる「株式会社」の意味にはまだ至っていないようである。

明治六年(1873)に、著名なる知識人たちが明六社を結社し、機関誌『明六雑誌』には「会社」も、その字順の逆の「社会」も同時に使われていた。

本朝ニテ學術文芸ノ会社ヲ結ビシハ今日ヲ始メトス。

乃ち民間志気の振ふなり社会の立つたり極めて可なり

ここではやはり志を同じくする仲間の結社を意味するのみである。同じく箕作麟祥の訳した『国際法』(1873-1875)にも、「会社・社会」が併存し、一種の類義関係をなしている。

国八各人及ヒ会社ト同シク己レニ属財産ヲ保有シ 卷一

畢竟是レ亦人間社中ノ一人タレハ互ニ其社会ヲ結合スル不朽一般ノ律

3) 注1に同じ。

法八之ヲ循守セサル可カラス 卷四

しかし語の意味からみて、この二語はいずれもまだ「なかま、同党」の意に留まっているため、同一社団の人を「社人、会人、社中」と呼んだりすることができ、当時では甚だ流行した言い方である。この時点では、今日の「社会」、即ち当時 society の訳語としての「社会」がまだ定まっていない。

2.2 「社会」に何が含まれているのか

明治六年(1873)以降、営利を目的とする結社が徐々に「会社」を用いて company に対訳するようになり、たとえば、1875年1月4日の『読売新聞』では「会社の米穀売買相場取引は許可が必要」といった使用が見られるようになり、明治八年ころに、「社会」がようやく society の訳語に固定してきた。それでも、当時の知識人久米邦武(1839-1931)はなおもその両者の意味に質疑し、

全体『ソサイチー』という語は『コンペニー』の如く組織的なものを  
さすか、只多数人の会衆を名づけるか

とその混同ぶりに悩まされているようだ。そのほか当時にはさらに「community」も「社会」と意味関係を結び、柴田昌吉・子安峻の『附音挿図英和字彙』(1873)ではそれを「共用、衆人、会社」と訳し、ヘボンの『和英語林集成』第三版(1886)では逆に「社会、なかま」と訳していた。このように、「社会」は当時において三つの英単語 society, company, community に対訳することができる。むろんご存じの通り、現代日本語ではそれらを「社会」「会社」「共同体」と別々に訳している。

時代が下って、日本語における「society = 社会」の対訳が形成されたのち、大築拙藏が『万国公法』(1882)を英語原文から翻訳する際、もう「会社」という語を用いず、「社会」という一つの形態に統一してきた。即ち英語 society を漏れなく全部「社会」に訳す方向へとシフトする。たと

えば、下記の英文原文に照らしてみれば societies の漢文訳と日本語との違いがわかる。

『万国公法』の英文原文：The peculiar subjects of international law are Nations, and those political societies of men called State.

漢訳『万国公法』(1864)：人成群立国，而邦国交際有事，此公法之所論也。

重野訳『万国公法』(1870)：人々群集ヲ成シ，各ソノ国々ヲ立テ、  
コノ国カノ国ト交際スルノ上，ソレソレニ仕事アリ。ソノ仕事ニ付テ公法アリ。此レ公法ノ論ズル所ナリ。

大築訳『万国公法』(1882)：公法ノ論スル所ハ国民(ネーション)及ヒ  
国(ステート)ト称スル此社会ヲ以テ主目トス

漢文訳では「成群」と訳しているから、それを受ける重野訳も「群集ヲ成シ」と直訳したのに対して、英文から直接訳した大築訳は時代を反映したこともあって「社会」をもって英語の political societies of men に対訳し、しかも「国民」「国」と「社会」を並列して等同の関係に位置づけている。同様の例もその後の society of men の対訳に見られる、

凡ソ国ト称スルモノハ人合衆シテ共ニカヲ協ハセ以テ同安同好ヲ計ル  
社会ヲ云フ。

したがって、「社会」は society との結合をなしたにもかかわらず、その自身の持つ意義についてまだ理解が行かないようだ。たとえば矢島翠氏の研究によれば、明治七、八年に永峰秀樹が『欧羅巴文明史』を翻訳する際、第十章になってからようやく「社会」を使用し始めたが、その前の「総論」では最初「交際」を使っていたし、いくつかの異なる訳を経て、次に「国(勢)」または「国家」をもって対訳してきたことがわかる<sup>4)</sup>。

それと同じように、中国語の近代翻訳にも似たような傾向が見られる。

---

4) 矢島翠『欧羅巴文明史』解題，加藤周一・丸山真男編『日本近代思想体系 15 翻訳の思想』岩波書店，1991。

孫青氏はその著書にもっぱら近代政体を論じる漢訳洋書『佐治芻言』(1885)を取り上げ、その翻訳中にも英語 society を「国」と等同の概念と見做していることを指摘していた<sup>5)</sup>。つまり同じく近代国家に向かっていくアジアの国々にとって、新しい概念「社会」への理解がややもすれば「国家」の意義に近づこうとしているようである。

日本において、『哲学字彙』(1881)がこの対訳を採用したのち、「社会」の普及が加速され、君主と庶民との間の層を表すようになり、鈴木貞次郎『小学修身書字解』(金港堂, 1881)にも、

社会 国人ソウタノナカマ。一国人民の社(アツマリ)ヲ総ベトナヘ  
テ社会トイフ。(卷三, 四三)

社会 世ノ中(卷四, 四二)

と、「人民の集まり」や「世の中」の意味となっているのがわかる。しかも当時の「女界、文学界」の「界」の表す範囲も次第に明瞭となってくる。1890年代になって「社会問題」という語が流行したことで、完全に人間世界を意味する広義的な用法が確立されたように見受けられる。

### 2.3 「群」をもって対訳する中国語

中国では古来、天子至上の「天下観」をもって世界を見てきたが、近代西洋の国際法『万国公法』(1864)の漢訳によって、次第に伝統的な朝貢冊封体制から近代的条約体制へのシフトを進め、国際秩序や周辺関係を新たに構築しなければならなくなるので、「国家」が対等的な、普遍的に受け入れられる概念として理解できたが、東アジア各国の内部においてはただ上に君主があり下に庶民があるという二層構造しかないから、西洋由来の「社会」という概念がなにを意味するか、どんな層を表すかはまだ理解できていなかった。

5) 孫青『晚清之「西政」東漸及本土回応』P179-181(上海世紀出版集團, 2009. 10)

前に触れたように、中国語古典に使われている「社会」は特定の熟語には成りきっていないため、十九世中葉に使われていても古典的意味に留まっているだけである。しかし、十九世紀後半のロブシャイドの『英華字典』(1866-69)でははっきりと「society」を「会、結社」と訳し、「company」を「公司、商会」と訳し分けている。当該辞書の日本での広汎な応用（二度にわたって翻刻された）に鑑みて、このような分けた訳が日本語の「社会」と「会社」を分けさせる要因の一つとなっているかもしれない。むろん社団組織を表すときに、中国語ではさらに「公会」などの言い方も多用する。

十九世紀末期、中国の翻訳家嚴復は「society」を一文字の「群」と訳していた。たとえば、1851年スペンサーの『Social Statics』を、日本では松島剛が『社会平権論』(1881)と訳したことで、自由民権運動の直接的な原動力の一つになっているのが知られている。それに対して嚴復は1880年から1881年の間に初めてスペンサーの学説に触れ、1895年に『直報』で発表された「原強」に次のように書いてある。

錫彭塞者，亦英産也，宗其理而大闡人倫之事，幟其学曰‘群学’。（スペンサーは英国人でその説を一言でまとめると人倫のことを論ずるものであり、その学説を「群学」と掲げる）

ゆえに、1903年にそれらの文章や訳文を集めて『群学肆言』と名付けて出版した。そして同訳著の中にさらに『群己権界論』(1899)というのがあり、これはJ. S. ミルの On Liberty から訳出したものであり、ここに使われる「群」は現在の「社会」、「己」は現在の「個人」、つまり個人の権利と社会の制約の問題を論ずるものである<sup>6)</sup>。

実際には、日本語で使われている「社会」の意味用法は近代中国の思想家梁啓超によってそのまま中国語に受け入れられている。早くも氏の「論学日本文之益」(『清議報』第十冊、旧暦1899.2)に「群学(日本謂之社会学)」

6) 日本では早くも1872年に『自由之理』と訳し、嚴復はわざと「自由」の二字を避けていたようであるが、現在の中国語訳も『論自由』となっている。



という対訳的注釈が見られ、同冊の「本館論説」にも「資生学、即理財学、群学、即社会学。」など、わざわざ中国と日本との翻訳語の異同を列挙し、中国の「群学」が日本語では「社会学」と、概念の同定を図ろうとしている。

しかし、わずか二年後の『和文漢読法』増補本(1901)において、日本語の「世態学」<sup>7)</sup>に対して、今度は「社会学即群学」をもって解釈しているところからみれば、すでに「社会学」を中国語側の訳語として対訳し、逆に「群学」が補助的な解釈に退かれている。この種の対訳における語の逆転も同時に中国語本来の訳語「群学」の退潮を意味することであろう。

事実、嚴復も1903年に、ついに「社会」という語を採用するようになり、『A History of Politics』を『社会通詮』と訳し、自序にも「中国社会猶然一宗法之民而已(中国社会はなお宗法の民にあるのみ)」と、「社会」の使用を始めている。

二十世紀初めの英華辞典にもようやく「社会」が登場するようになる。楊少坪編集の『英字指南』初版(1879)ではまだロブシャイド英華字典の語釈を受けて「society」を「結社」と訳していたが、その増広版(1905)の出版時には「社会」と改訳してしまう。同じ現象は宣教師の作った英華専門語彙集にも見られる。たとえば、TECHNICAL TERMSの初版(1904)ではただ「society」を「人世」と訳しただけで、増補版(1910)に至ってはようやく「社会」を補った。

ここに至ってはじめて、日中間の「社会」が内容および形式上の統一を見ることができた。

### 3. 「社会主義」から「共産主義」へ?

#### 3.1 音訳から意識へ

「社会主義」と「共産主義」が一对の類義概念として最初に現れたのは

---

7) 『哲学字彙』の凡例では専門術語分類の一つとされている。

明治二年の『真政大意』(1869)である。これは後に初代東京大学総理になった加藤弘之が書いた西洋政体を紹介する小冊子であり、ドイツ語を習った彼は、歐洲の経済学を紹介する時に、それを「コムミュニスム(共產主義)」と「ソシアリスム(社会主義)」に分け、両派の主義が大同小異と言っていた。当時ではなお適当な漢字語訳を見いだせないで、とりあえず音訳で済ませている。

福沢諭吉の『民情一新』(1879)にも同じような音訳の「ソシャリスム(社会主義)」を使っていた。

我国普通教育ノ成跡として見る可きものは、方今、「チャルチスム」「ソシャリスム」と二主義の流行を得たり。

前述のように「社会」は基本的に1875年ころに society の訳語として定着し始めたが、しかし「主義」の成立はそれよりやや遅く、1877年に見られる。『哲学字彙』(1881)にはすでに「～主義」が使われたものの、communism と socialism 二語の訳がまだ「共產論」と「社会論」との訳に留まっていて、「主義」とは結合していない<sup>8)</sup>。漢字語訳の「社会主義」がはじめて現れたのはその翌年の穴戸義知訳『古今社会党沿革説』(弘令社出版局, 1882)第一巻第一章である。その中には、

此篇二八從來同一ノ意義トシテ用ヅシコムミュニスム(結社主義仮ニ旧社会主義ト訳ス)トソシアリスム(社会主義仮ニ新社会主義ト訳ス)トノ兩名稱ヲ以テ本文ノ主旨ヲ開示スル

と、ここでも音訳のコムミュニスム(共產主義)とソシアリスム(社会主義)を同一視し、しかも前者を「結社主義」と訳し、また「旧社会主義」と称す。後者を「社会主義」と訳し、「新社会主義」とも言う。したがって、当時「社会主義」という語に甚だ広泛な内容が含まれていたようだ。

1888年の時点では、和田垣謙三が「社会主義」と題する一文にこの語

8) 棚橋一朗『和訳字彙』(三省堂, 1888)には socialism を「社會論, 交際之理, 衆用之道; 共產論」と解釈し、「社會論」と「共產論」を区別しない。

## 「主義」の流布と中国的受容

の成り立ちを下記のように解釈している。

社会主義とは、英語ソシャリズムの訳語で、ソシャリズムとはソサイ  
テー即ち社会と云ふ字にイズムと云ふ語尾を加へたる語で、イズムは、  
学派、宗派又は主義と云ふことを言ひ現はす為めの語尾でありますか  
ら、ソシャリズムを社会主義と直訳したのであります(『東洋学藝雑誌』  
八十八号)

要するに、「社会主義」は音訳を経て現在のような漢字語訳になったの  
も至極当たり前の話である。

### 3.2 「共産主義」が「社会主義」に含まれている

日本において最初に「共産主義」という漢字語訳の使用が明治十五年  
(1882) 6月23日の『朝野新聞』にある城多虎雄「論欧州社会党」に見ら  
れ、

同ジク社会党ノ名アリ、而シテ其实八処ニ依リ人ニ依リテ其ノ主義ヲ  
異ニス日耳曼ノ職人社会党八仏ノ「コンミコン」ニ異ナリ或ハ又共産  
ノ主義ヲ実行セル者アリ破壊主義ヲ取ル者アリ或ハ着実ニ劳力社会ノ  
改良ヲ務ムル者アリ左レバ社会党ノ名ノミヲ以テ直チニ之ヲ目シテ財  
産ノ平均ヲ主張スル者ナリ破壊主義ヲ取ル者ナリト見認ムルハ寧口臆  
断ニ失スルノ嘲リヲ免カレザル可シ。

のように「共産ノ主義」という形である。この文脈からみれば当時から社  
会党の旗印を掲げた各種の主義主張を区分弁別する必要があり、一概には  
否定できないという。同年には大石正己訳述の『社会改造新論』(1882)に  
「共産主義」の形が出てくる。

社会新組織ノ困難有効及ヒ重量並ニ共産主義賛成家ニ対スル告示

そして数年後に、藤林忠良、加太邦憲編の『仏和法律字彙』(1886)には  
「communism 共産主義」の対訳が収録されたものの、明治中期の国語辞  
典『日本大辞書』(1893)には、それを採録せず、ただ「社会主義」だけを

収録し、次のように解釈している。

社会一般ノ幸福ヲ進メルノヲ目的トスルモノ。此主義ニ由ツテ財産ハ  
共有物デアルトノ説モ出ル。

となると、所謂「財産共有」云々の説はあたかも「共産主義」が含まれる  
ようである。明治三十八年の『普通術語辞彙』(1905)を紐解けば、はっき  
りと「共産主義」を「社会主義」の枠内において解釈されているのである。

国家社会主義，基督教社会主義，共産主義を概括して社会主義と名付  
け，以て個人主義なる虚無主義と区別せんとするのである。

ゆえに，実際の使用において，「社会主義」の量は「共産主義」よりは  
るかに多いことがわかる。総合雑誌『太陽』にある両者の使用状況もそれ  
を裏付けている。

	社会主義	共産主義
1895年	3例	0例
1901年	17例	1例
1909年	86例	3例
1917年	26例	0例
1925年	78例	54例

「社会主義」が時代的に早く現れただけでなく用例も多い。最も頻出し  
たのは1909年であり，それまでの日本社会主義運動の高まりを反映させ  
る数字である。比べてみたら，「共産主義」がより遅く現れて来て，1925  
年の「共産主義」の急増は，日本共産党の成立(1922)と世界共産主義運  
動の勃興と関連するのであろう。と同時に，「社会主義」の再興はマルク  
ス主義の解釈が加えられた概念となり，即ち共産主義が人類の到達する最  
高段階で，階級を消滅し，生産力の高度なる発展が得られるというから，  
その過渡期にあたる段階は今度逆に社会主義と呼ばれるようになる。こう  
いった両概念の相関連し合うことは両者の同期急増をもたらしていると思  
われる。

### 3.3 「社会主義」「共産主義」の中国への伝播

十九世紀中国で出版された口ブシャイドの『英華字典』(1866~1869)では西洋由来のこの二つの概念についてつぎのように対訳していた。

Communism 大公之道，通有百物之道

Socialism 公用之理

つまり、この解釈も communism と socialism の意味を区別しようとしている。前者を「大公之道」と訳し、後者を「公用之理」と訳すが、多少意味的には近いところがある。後に中国語では「大同」「均産之説」「通用、共用者、均用者」をもって「共産主義」の概念を表す場合もあったが、二十世紀に入ってから、西洋人の編集した新語集 TECHNICAL TERMS 初版(1904)に Socialism を「均富」と訳し、Communism を「有無相通」と訳したが、最終的には日本から来た影響に抗しきれず、1910年の再版時に、後者を直接「共産主義」と訳しなおした。

「共産主義」「社会主義」二語が中国語の文脈での初期使用は当時に日本に滞在中の梁啓超にほかならない<sup>9)</sup>、彼が主筆を務め、日本で編集、発行された『清議報』(1898-1901)は日本発の新知識を伝播するための重要な媒体であり、日本語の基本概念が中国語への転換を果たすルートの一つである。そのため日本から中国へと両者の影響関係や、近代知識のモデルチェンジの過程において日本由来の知的資源がいかに利用されたかが問題視されている。実際に『清議報』に多く出てきたのは「社会主義」であって、

「維持社会主義者聯圖革命」第3冊<東報譯編>

「即社会主義，雖我當局之所深忌。」第41冊<時論譯錄>

「然社会主義，實可行於我国之政治上。」第41冊<時論譯錄>

「社会主義，至十九世紀下半期，其勢力逐日增高。」第51冊<時論譯錄>

「或取社会主義之一部，而改良社会。」第100冊<時論譯錄>

---

9) 金観涛・劉青峰(2008)

「至社会主義，亦非全與帝国主義不相容者也。」第100冊〈時論譯録〉  
「至破壊的社會主義，非獨與國家不相容。」第100冊〈時論譯録〉  
しかもほとんど日本語から訳された文章に出ている。1901年末の第100冊によようやく梁啓超の「康南海先生傳」に、

先生之哲学，社会主義派哲学也。泰西社会主義，原於希臘之柏拉圖，  
有共產之論。

と、「社会主義」が使われただけでなく「共產之論」も出てきたが、「共產主義」の字面は使われていなかった。

1903年に在日留学生汪榮宝・葉瀾が編集した新語集『新爾雅』（上海：明権社）にも、

廢私有財産，使歸公分配之主義，謂之共產主義，一名社会主義（私有財産を廢し，それを公に分配させる主義は，共產主義という，社会主義ともいう）。

と、両主義の類似性を説明していた。

中国革命の父といわれる孫文の三民主義思想のなかにも伝統的な「大同思想」が見て取ることができる。「民生主義とは、ほかならぬ社会主義，またの名を共產主義と名付けるもので，すなわちこれこそが大同主義である。」と氏の『三民主義』（1924）において主張されている<sup>10）</sup>。当時でも「社会主義」と「共產主義」とが同じように見受け取られているようである。

二十世紀の初頭，すでに数多くの社会主義関係の文献が日本語翻訳を介して中国に伝わってきた。たとえば『社会主義』（村井知至著，羅大維訳，1903），『社会主義概評』（島田三郎著，作新社訳，1903），『近世社会主義』（福井准造著，趙必振訳，1903），『社会主義神髓』（幸徳秋水著，創生訳，1907）などが出版されたり，『帝国主義』（浮田和民著，出洋堂生訳），『二十世紀之怪物帝国主義』（幸徳秋水著，趙必振訳，1902）などの著書も訳されたり，さらに無政府主義についての紹介と翻訳などがあつたりした。

10） 溝口雄三・池田知久・小島毅『中国思想史』（東京大学出版会，2007），p 230。

## 「主義」の流布と中国的受容

中国語版の『共産党宣言』も日本語版から転訳されたことが知られている。1904年に幸徳秋水と堺利彦が『平民新聞』に共訳の『共産党宣言』（英文からの転訳、第三章未訳）を載せたものの、すぐさま警察の検査に引っかかり、『平民新聞』が二か月後に発刊停止に追いこまれただけでなく、幸徳秋水もまたそれに巻き込まれて数か月投獄されてしまった。1906年に二人は再び雑誌『社会主義研究』を創刊し、創刊号に『共産党宣言』の全訳を載せた。中国語の最初の二種類の訳本（1908年『天義』には第一章のみ、1920年に陳望道による全訳）も同じく1906年の日本語訳に基づいて重訳されたものである<sup>11)</sup>。

なぜ「社会主義」という概念を避けて使わなかったのか、陳慶石が1945年に『共産党宣言』を翻訳する時に次のように解釈している。

該宣言之所以稱為「共產」，不稱「社会主義」，乃是因為當時一般人把各種烏托邦主義及改革主義的思想都叫做社会主義，而馬克思與恩格斯則不願使共産党同盟的綱領和這些主義相混淆的緣故。宣言的第三章，即是对流行的各種社会主義和改革主義实行客觀的批判。（この宣言が「社会主義」と称せないのは当時一般の人が各種ユートピア主義や改革主義の思想をも社会主義と呼んでいて、マルクスとエンゲルスは共産党同盟の綱領をこうした主義と混同させたくはなかったからであろう。宣言の第三章はすなわち当時流行した各種社会主義への批判でもあった。）<sup>12)</sup>

この点は前述したように初期社会主義の概念が森羅万象を含むことと関係しているのであろう。

---

11) 陳(2006)を参照。

12) 中山文化教育館編集，中山文庫，陳慶石訳『比較經濟制度・下』附録「共産党宣言」，商務印書館，民国三十四年(1945)四月初版，p 277。

## 4. 「帝国主義」の成立

### 4.1 「帝国」と Empire の結合

「帝国」の二字は字面とおり、中文古典において帝王が司る国家の意味であり、隋代の『文中子・問易』に、「強国戦兵，霸国戦智，王国戦義，帝国戦徳，皇国戦無為。」とあり、「強国」「霸国」「王国」「皇国」と異なると、徳を以て治められるのは「帝国」であると説明されている。後の宋代の周邦彦の『看花回』にある「雲飛帝国，人在雲辺心暗折。」は都の意に使われている。したがって、中国古典における「帝国」は熟語としてまだ完全な複合語となっておらず、意味も現在と異なる場合が多い。

「帝国」と西洋概念との結合は最初日本語の資料に見られる。中国から伝えられた漢籍『文中子』が江戸の元禄八年(1695)に深田厚齋によって訓点を施され出版されてから、寛政元年(1789)に朽木昌綱の『泰西輿地図』にオランダ語 Keizerdom との対訳に使われた。十九世紀初頭の蘭和对訳辞典『訳鍵』(1810)にはこの「帝国」との対訳が収録されている。

Keizerdom 王民，帝国，王威

そして、英和・和英の対訳資料として宣教師メドハースト(Walter Henry Medhurst, 麦都思 1796~1857)がオランダの植民地だったバダビヤで出版した『英和・和英語彙』(An English and Japanese, and Japanese and English Vocabulary, 1830)が挙げられ、その英和の部では Empire を直接日本語の「帝国」と対訳し読音と片仮名も附してある。

Empire Te-i Kokf' テイコク 帝国

一方、和英の部では、上述の順序を逆さまに並び替えているだけである。メドハーストは日本に行ったことがなく、彼の日本語についての知識はオランダ人から学び取った可能性もあれば、当然ながら日本の漂流民を世話した経験からも直接日本人から聞き取ったことも考えられる。事実、ウィリアムス(Samuel Wells Williams, 衛三畏 1812~1884)なども日本人漂流民が



ら日本関連の知識を相当な程度で聞き取ったから、そちらからの可能性をも排しない。二十数年が過ぎた後、この辞書は村上英俊によって『英語箋』(1857)と翻刻され、さらに日本人の手による最初の英和辞典『英和对訳袖珍辞書』(1862)にも受け継がれ、「Empire = 帝国」の対訳が今日に伝わることができたわけである。

逆に中国では、十九世紀に出版された一連の英華字典に「帝国」を採用したものがなく、モリソン(R. Morrison, 馬礼遜 1782-1834)の *A DICTIONARY OF THE CHINESE LANGUAGE* 第6巻(1822)では Empire を直接「大清国」と訳し、十九世紀においてもっとも影響を及ぼしているロブシヤイド(W. Lobscheid, 羅存徳)の『英華字典』(1866~1869)でも、Empire を「皇之国」と訳していた。

日本での使用は早くも堤穀士志が丁韞良(W. A. P. Martin)の漢訳『万国公法』(1864)から日本語に翻訳した『万国公法訳義』(1868)に、

摩納哥 帝国二非ズ。其国ノ位公候ニテ、大名ノ位也(一下・三十二)  
「摩納哥モロッコ」に対する注釈にこの語が使われていた。この解釈はむろん漢文訳の『万国公法』にはない。

明治初期、日本の啓蒙的思想家福沢諭吉がかの有名な『文明論之概略』(1875)にも「羅馬の帝国滅亡したりと雖ども」と使ったことから、近代日本において「帝王によって司り、君主制を実行している国家」という意味の定着が中国よりも早いことがわかる。明治中期に至って、国家主義の台頭につれ、天皇を中心とした君主立憲制が確立されたことで、明治憲法では自ら「大日本帝国」(1889)と称せられるようになった。その前後には、たとえば「帝国大学」「帝国劇場」「帝国学士院」「帝国博物館」「帝国ホテル」など「帝国」を冠する学校や会社や機構名が雨後の筍のごとく出てきた。

清末の中国でも清朝を大清帝国と称することがあり、南社会員譚作民の詩作「丁未黄海舟中感賦」(1907)に「皇輿有界捐禅海、帝国無人失霸才。」

とあるのは「大清国」そのものを指しているが、時代的にみれば「帝国」の語がすでに中国に伝来してからのことである。たとえば、早くも黄遵憲『日本雑事詩』（1879）に「内称曰天皇，外称曰帝国」との記載があり、明らかに日本語の影響下の表現であろう<sup>13)</sup>。むろん、前に触れていたモリソンの英華字典の対訳、即ち外国人の清朝に対する位置づけも「帝国」の語を使わせる素因となっている。

#### 4.2 「帝国主義」の起源

帝国主義の概念そのものは英語の Imperialism に出自したもので、Oxford English Dictionary で確認すると、十九世紀中葉の1858年にすでに登場し、今日概念形成は1870年以後の英国で勃興した政治に基づくもので、自由主義に対して起った膨脹主義または植民地主義を指し、十九世紀末期では欧米各国の振興と拡張の主たる方向とされてきた。

前述したように日本語において -ism と「主義」との対訳が早くも明治十年の新聞または『哲学字彙』（1881）に出てあるが、本来「帝国」という漢語概念があれば、「主義」を付け加えれば自然に一語となるはずだが、意外にもこの組み合わせの誕生が遅かったようである。実際に初期の英和辞典、たとえば明治六年の『附音插図英和字彙』（1873）に Imperialism がただ「帝位」と訳され、その後の増補訂正版を経て明治二十年（1887）になっても依然としてその訳が維持されている。明治二十六年（1893）一、二月の『教育時論』（東京：開発社）では東京大学教授井上哲次郎の「教育と宗教の衝突」なる文が載せられ、その中に「彼等も亦多少羅馬帝国の主義に同化したるならん」と出ているが<sup>14)</sup>、まだ固定した一つの表現にはなっていない。なにせ日本自身を帝国と称しているから、主義との結

13) 永田健助著『萬国商業地誌』（東京：丸善，1889）第一篇が「支那帝国」となり、安東不二雄著『支那漫遊実記』（東京：博文館，1892）にも「大清帝国」なる一章を設けている。

14) 傍点が筆者によってつけられたもの。

合がややもすれば帝国に別の意味をもたらす恐れもあって、最初は「殖民地」などの概念で欧米の対外拡張路線を描いたりしたが、1898年ころになってようやく Imperialism と「帝国主義」との結びつきが増え始めた。たとえば高山樗牛が1898年9月に書いた「殖民地と歴史の教訓」(『時代管見』, 東京: 博文館, 1899)には、音訳の「イムピアリズム」が見られた。

米国は遂に全菲律賓の占有を断行すべしと伝へらる。『イムピアリズム』は遂に西班牙に勝ちたる米國を征服せり。

そして同じ年の1898年末に書いた「罪惡の一千八百九十八年」(『時代管見』同上)にはようやく括弧付きの「帝国主義」が使われた。

二個の事実とは何ぞや、極東問題の解釈は其一也、北米合衆國『帝国主義』は其二也。

ここで前者の極東問題とは列強の中国への浸食について言っている。同年三月ドイツが膠州灣を租借し、ロシアが旅順を租借し、しかも大連並びに南滿鐵道の敷設權を獲得した。続いて英国による九龍と威海衛の租借があったりした。後者はアメリカがフィリピンを占領しようと欲することを指している。帝国主義が天下を風靡した大勢となり、「人類歴史の最も慘憺たる齣場が方に是より開かれむとしつゝある也」と高山樗牛が嘆く。翌年の徳富猪一郎著『社会と人物』(東京: 民友社, 1899)にもっばら「帝国主義の真義」の一節を設けて、その中に「帝国主義」の概念が英国に始まり、米國に及びそして日本に伝わり、目下政界の熟語となっていると言い、帝国主義をプラス的に紹介していた。

明治三十三年(1900)十一月十七日の『万朝報』に「帝国主義を排す」なる一文を載せ、その冒頭で次のように言う。

英国の総選挙に於いて、いわゆる帝国主義は勝利を獲たり、米國の大統領選挙に於いて、またいわゆる帝国主義は勝利を獲たり、故に万人皆曰く、帝国主義は世界の**大勢**なり、これに順う者は栄え、これに逆らうもの亡ぶ、我が國民またこれを以てその主義、目的とせざるべ

からずと。帝国主義とは、そもそも何事を意味するか。

これらを見て分かるように、当時は欧米世界の主流はまさしく帝国主義の最盛期であり、日本でも、「帝国主義」の頻出が1901年にある。幸徳秋水著『帝国主義』（東京：警醒社、明治三十四年四月、1901）が出版されただけでなく、浮田和民著の『帝国主義と教育』（東京：民友社、明治三十四年九月、1901）も世に出て、後者は第一章で「日本的帝国主義」という概念を明確に提出した。同年の総合雑誌『太陽』における使用も71例に達し、年末にさらに高田早苗訳『帝国主義論』（東京専門学校出版部、明治三十四年十二月）が出版された<sup>15)</sup>。なお著名な民権活動家である中江兆民の「一年有半」（1901）にも、この語を多用していた。

民権は是れ至理也、自由平等是れ大義也、此等理義に反する者は竟に之れが罰を受けざる能はず、百の帝国主義有りと難も此理義を滅没することは終に得可らず。

二十世紀初めの、徳谷豊之助・松尾勇四郎編『普通術語辞彙』（東京：敬文社、1905）では更に詳細にこの概念を次のように解釈している。

帝国主義とは、政治的意義の語にして、一言以て謂へば、帝国の拡張を以て社会生存の最高善又は最良策となすものを謂ふ、故に如何なる理想如何なる主義を有するに関わらず、帝国主義とは、自己の勢力を用ゐる機会の許す限り、世界の表面に於て可成的多くの領土を割取し、又は割取するに至らざる迄も、其の勢力範囲を扶植するを以て主義となすものと謂って可なり。

しかも、英文との対訳辞書に直接現れてくるのもその前後であろう<sup>16)</sup>。

15) 高田早苗は『国家学原理』なる書をも著し、その第五章の題目は「民族主義と帝国主義」であり、「東京専門学校史学科一回一学年講義録」と表記されるところから、或いは1901年よりも前から「帝国主義」を使用し始めたのではないか。

16) *English-Japanese Dictionary of the Spoken Language*, Third Edition, KELLY & WALSH Ld. PRINTED BY THE SHUEISHA, TOKYO. (1904) には「Imperialism 帝国主義」の直接対訳が見られる。

#### 4.3 中国語の文脈における初期の使用

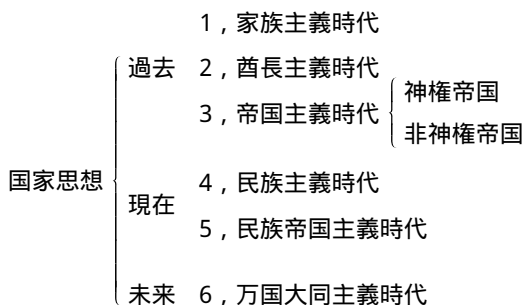
前述した横浜で発行された『清議報』(1898~1901)は当時流行した各種の主義を積極的に紹介していたから、日本からそうした新概念を導入した量と規模なども窺える。その『清議報』の三年間において、「帝国主義」の逡増の幅は6:11:111となり、出現回数も断トツに多く、「~主義」の総数の三分の一を占めていることから、完全に十九世紀末から二十世紀初頭にかけての時代的特徴が映し出されている。しかも数字上からも1901年がこの概念の最も活発した年であり、前節で触れた日本語中の「帝国主義」の使用ピークと『清議報』で訳出されたものとほぼ同期であることがわかる。たとえば1898年の第一冊にはただ「整定官制為主義」のような「主義」の単独用法しかなく、第二冊<sup>17)</sup>に入ってから「帝国主義」に関する訳文「極東之新木愛羅主義」を載せ、「挙用此議，使美英二国操持世界共通之新帝国主義。」の例が見られる。しかし、その文章は「東報訳編」という日本語からの抄訳欄に収められ、しかも日本人の片岡鶴雄によって訳出されている。「新木愛羅主義」は即ち現在の「新モンロー主義」である。よって、この使い方を日本語からの漢訳とみなし、中国人の直接使用ではない。しかし翌年(1899)の第十三冊に「其他或云帝国主義。或云侵略主義。或云平和主義。」などの例が出始め、後の第十七冊には「帝国主義」を「帝国主義者謂專以開疆拓土擴張己之國勢為主即梁惠王利吾國之義也(帝国主義とは専ら疆土を開拓，國勢を擴張させることを主とする。即ち梁惠王の吾國に利す義なり)。」とまで解釈している。

この種の中国古典にある梁惠王を例に概念を解釈することは確かに人々の理解の一助になる。なぜなら、梁惠王の眼中には、自己がいかに土地を新たに獲得するか、昔の栄光を回復させるかが関心事であり、これが彼のもとめる利であるから、孟子の眼から見ると、これはただただ小利にすぎ

17) 『清議報』第二冊は陰暦十一月二十一日に発行し、陽暦の十二月二十三日にあたる。

ず、梁惠王一個人のための私利である。当に「仁義」を以て天下に施し、天下の皆に幸をもたらしべけんやと。この解釈には「帝国主義」に対する多少の批判の意が込められている。

『清議報』第九十冊(1901)以降、「国家主義、民族主義、帝国主義」をめぐっての議論がますます増え、その中で梁啓超の「帝国主義」に対する議論が際立っていて、しかも「民族主義」という概念を礎にして展開され、氏の「国家思想變遷異同論」(第九十五冊)にある歐洲国家思想の「過去現在未来變遷之跡」を以下の図式で説明している。



つまり「今日の欧米は則ち民族主義と民族帝国主義の相互作用の時代なり。今日のアジアは則ち帝国主義と民族主義の相互作用の時代なり。」<sup>18)</sup>と言い、且つ欧州の「民族主義は十九世紀に最盛期を迎えその萌芽期は十八世紀の下半にある。民族帝国主義の最盛期は二十世紀にあってその萌芽期は十九世紀の後半にあるから、今日の世界は実は此の兩大主義の活劇の舞台なり。」<sup>19)</sup>と論じている。

18) 二十世紀初めになると、梁啓超の説を受けて、楊篤生の『新湖南』(東京、1902)第四篇では両者の関係について「この帝国主義は、実は民族主義を根本にしているから、ゆえにこの帝国主義の潮流を阻止しようとする者は、民族主義をもって、垣根を築いてそれを守ろうとせず、則ちまるで草木をもって洪水の上に置くがごとし。」と分析している。

19) 梁啓超は「新民説」(『新民叢報』、横浜：1902)第二節において民族帝国主義について下記の解説を施している。「民族帝国主義とは何か その国民の実力は内に満たして外に溢れ出す、汲汲として権力を他の地に拡張しようとするものである。」という。

とりわけ目立つのは「時論訳録」欄に連載された「帝国主義」の長文が四回にわたって『清議報』の第九十七、九十八、九十九、一百冊に載せたことである。それは『国民新聞』に十五回分の連載から訳出されたもので、翻訳の素早さと刊行のスピードからみて当時この主義に対する関心がほとんど日本と同時に高まり、日中間の知識概念の移転過程をも窺えることができる<sup>20)</sup>。

その後、『新民叢報』に、梁啓超が『論民族競争之大勢』(1902)を連載し、繰り返し「帝国主義」について論を展開し、まず、

英人は中古以来、羅馬帝国と相容れず、去りて自立し、実に民族国家の発生の嚆矢となる。故にその民族帝国主義もまた先鞭をつけ、属地を善処する法を得て、ついに世界を制覇する。

とその由来を究め、それから各国の帝国主義に分析を加えた後、さらに、最近帝国主義の声は、国中に溢れ出て、政府の大臣やら、政党の論客やら、学校の教師やら、報館の筆員やら、乃至は新入学の学生や、市井の販賣まで、口にその名をしそれを羨しまざるものはなし。

と付け加えた。このような状況はまさに 1899 年前後の日本と似ていて、文中の描写には先に見た国民新聞の主筆徳富蘇峰の文章から受けた影響が

---

20) 日本語の『国民新聞』の原文は太陽暦 11 月 5 日に連載を開始、11 月 23 日までに終わる。全部で 15 回にわたっている。しかし『清議報』ではそれを 4 回分として連載し、第九十七冊(5, 6, 7 日の三回分)、九十八冊(9, 10, 12 日の三回分)、九十九冊(13, 14, 15, 16 日の四回分)、一百冊(17 日を略して訳せず、19, 21, 22, 23 日の四回分)で訳文を連載した。但し最後の日は最後の一段落だけを訳し、そのあとは中略の形で処理された。したがって第九十七冊が陰暦 10 月 1 日の発行で、陽暦の 11 月 11 日に相当するから、『国民新聞』の「帝国主義」の 5 日から 7 日までの三次分の連載は『清議報』第九十七冊の出版(11 日)までにわずか三日しかないのだ! ほとんど同時期に出版されたことになる。第九十八冊の発行は陰暦 10 月 11 日(陽暦 11 月 21 日)にあたり、「帝国主義」の連載がまだ未完であるが、時間的には多少の余裕があり、翻訳もややゆったりしている。第九十九冊の発行は陰暦 10 月 21 日(陽暦 12 月 1 日)にあたり、連載も已に終わった。にもかかわらず、第一百冊(陰暦 11 月 21 日)の掲載分ではやはり原文掲載のまる一回文を略したことで最後に全文訳の形で刊出された。

見られ、加えて帝制を維持する態度（Imperialismの初期の訳語が「帝位」であることとも関連か）を示しているから、蘇峰と同じように「帝国主義」に対してかなり好意的に受け止めているようである。

帝国主義の当時における流行について、梁啓超がさらに『生計学説沿革小史・斯密亞丹学説』（1902）に次のように言う。

况乎今日帝国主義日行，各国之民業，皆以政府為後楯，以出而競于世界。

また、雨塵子の『論世界經濟競争之大勢』（1902）第三節でも「帝国主義，既盛行于列国，凡政治家所經營，士大夫所議論，皆無不奉之為標表。」と、当時この概念が中国での人気ぶりが窺える。

1903年の新語集『新爾雅・積群』（上海：明権社）にもこの語を「以一群為主，而衆群從屬其下者，謂之帝国主義（一群を主とし，しかも群衆がその下に属する者を，帝国主義と謂う）」と解釈した。このことから分かるように，帝国主義という概念が日本を経由して中国に入り，基本的に日本での意味用法をそのまま転訳したため，当時の人たちはこの主義に対してなお好意的である。

#### 4.4 「帝国主義」対する批判

一方，社会主義者の幸徳秋水著『帝国主義』（1901）が日本帝国主義としての軍国主義及びその侵略について書いた檄文であり，翌1902年に早くも中国語訳が出てきて，中国社会主義運動に影響する重要な著書の一つとなっている。1906年7月から1908年10月まで中国の思想家章太炎が日本で同盟会の機関誌『民報』を舞台に，康有為，梁啓超をはじめとする改良派に対して批判を繰り広げる。1907年4月に，彼はインドの愛国志士鉢邏罕，保什らと共に日本で「亜洲和親会」を發起させ，日本に亡命しているアジア各弱小民族の愛国志士らを集めた最初の反帝国主義連合組織として，その『亜洲和親会約章』には鮮明に「帝国主義反対」と掲げ，且つ



未来の運動の主旨としている。

僕等鑑是則建亞洲和親會，以反对帝国主義而自保其邦族。他日攘斥異種，森然自拳，東南群輔，勢若束蘆，集庶姓之宗盟，修闊絕之舊好，用振婆羅門，喬答摩，孔，老諸教，務為慈悲惻怛，以排擯西方陀羅之偽道德。（『章太炎選集』，p 429）

革命派は「帝国主義」に対する認識を次第に深め、この主義への批判を展開し始める。章太炎が「送印度鉢邏罕，保什二君序」に「使帝国主義者之群盜，厚自慙悔。」とあるように、直接それを「群盜」と称す。また『駁神我憲政説』（1908）にも「今仮衆衆之言，以文飾其帝国主義，是猶借兼士之名，以文飾其兼併主義。」と、ずばり帝国主義の本質がすなわち兼併主義であると切り捨てた。

こうした認識が中国最初の近代総合辞典『辞源』（上海：商務印書館，1915）にも反映されたが、この時点では明らかに批判が足りない。

以進取兼併政策立国也。国力所及，務乘機擴張領土及權利範圍為目的，如美国世守蒙祿主義，不問本洲以外事，近頗改用帝国主義，漸伸勢力於境外是也。

1917年以後、レーニンがその『論帝国主義』に十九世紀末から二世紀初頭に独占資本主義に達した段階を帝国主義と定義し、この批判が一種の定論となる。中国において1919年の五四運動はまさしく反帝反封建の旗を掲げ、帝国主義を中国人民の頭上にのしかかる「三座大山」の一つとして打倒すべきものとする。1927年の『中国国民党第一次全国代表大会宣言』にも「国内之軍閥既與帝国主義相勾結，而資産階級亦眈眈欲起而分其饒餘，故中国民族政治上，經濟上皆日即于憔悴。」と、打倒帝国主義を中国革命の目標の一つと掲げている。1930年代の『辞海』初版（上海：中華書局，1936）では「帝国主義」についての解釈がちょうどこの変化を反映している<sup>21)</sup>。にもかかわらず、後の『辞海』修訂版（1979）ではさら

21) (Imperialism) 原詞由拉丁語 imperium 一字变化而来，指羅馬帝国之統治及其

にこの項目に大きな改定を加え、ほとんど全面的にレーニンの帝国主義観を採用し近代における歴史的趨勢を跡付けていた。よって今日の一般的な国語辞典『現代漢語詞典』（北京：商務印書館，1983版）でもその説にしたがって、

【帝国主義】(1) 壟断的，寄生的，腐朽的，垂死的資本主義，是資本主義發展的最高階段。它的基本特徵是壟断代替了自由競爭，形成金融寡頭的統治。对内殘酷压榨勞動人民，对外推行殖民主義和霸權主義政策。帝国主義是現代戰爭的根源（帝国主義は独占的，寄生的，腐朽的，死にかけている資本主義であり，その最高段階に位置するものである。基本的特徴は独占をもって自由競争に代え，金融寡頭制による統治が成立することが挙げられる。対内的には労働者を搾取し，対外的には殖民主義と霸權主義を推し進める政策をとっている。そして帝国主義は現代戦争の根源である。）と定義づけている。本来はこの概念が資本主義国家にむけて使っているものだったが，1970年代に，ソビエトの霸權主義を批判する時に，中国ではそれを「社会帝国主義」と名付けた。即ち口頭では社会主義を主張し実際では帝国主義を行うことで，機會主義から帝国主義へ変わったものと痛烈な批判を繰り広げた。言い換えれば，霸權を唱える可能性があれば，このレッテルの応用は自由自在である。

## 5. まとめ

「社会」が初期において company, society に対応するだけでなく，community に対応する場合もあったが，徐々に意味概念の細分化に伴う訳語が出そろった。「社会主義」はより広い概念で、『和訳字彙』（1888）には socialism を「社会論，交際之理，衆用之道；共產論」と解釈し，「社会論」

---

武力政策。後引伸為擴張殖民地運動。今則凡以武力經濟力侵略異国，压迫弱小民族乘機擴張領土或勢力範圍者，不論其国体若何，均称帝国主義。馬克思派学者謂此為資本主義發展之必然結果。

と「共産論」を区別しない時期もあった。後に「共産主義」と別々に Socialism と Communism の意味を分担したのは、一対一概念区分をより鮮明にする時代的要請に迫られたからであろう。

「帝国」は早くも隋代の文献に見えるが、なお一語として固定せず、その後の中国語の文脈における使用の頻度も極めて低い。逆に日本では漢文の吸収を通してこの語を獲得し、しかも十八世紀末にオランダ語の概念への対訳として使い、さらにこの対訳が十九世紀の英和辞典にも受け継がれ、「Empire = 帝国」の概念形成に寄与し、その流布を加速させた。

「帝国主義」は十九世紀末から二十世紀初頭にかけての世界的趨勢と潮流として、当時の欧米列強国家で盛んに行われ、日本もその流れに遅れまいと、天皇を中心とする君主立憲制が確立後、1889年に自ら「大日本帝国」と称し、次第に帝国主義路線を突き進むようになる。十九世紀末ころ、梁啓超をはじめとする中国の改良派知識人は『清議報』を通して日本由来の帝国主義概念を紹介し、それに対してある程度一定の幻想を抱き、同じくそれを当時世界の主要な潮流の一つと捉え、中国もこの流れに乗るべきと考えていたが、帝国主義の拡張的本質が必ず中国の利益を侵害する厳しい現実次第に直面させられる。それに対して、章炳麟をはじめとする革命派は、社会主義者幸徳秋水の影響を早くから受けて、帝国主義の本質への認識が早く、二十世紀初めには日本で被圧迫民族の代表を集め、帝国主義反対の旗幟を掲げていた。

1917年レーニンの『帝国主義論』がそれを資本主義発展の最高階段と定義し、しかも必然的にそれによる侵略戦争が起こると指摘して以来、後の歴史的発展もそのことを裏付けている。中国革命の現実も帝国主義打倒の要請から出発し、即ちそれらの中国における各種の独占的特権を剥奪してはじめて完全なる独立が得られると信じられてきた。

訳語の創出の視点からみて、「社会」「共産」<sup>22)</sup>「帝国」または「主義」

22) 『魏書・列伝』巻十四にその字面がみられる。「子隆同産数人、皆與別居。後

がともに中国古典に由来するものであったが、日本ではそれらをもって西洋の近代概念に対応させることで、流布が広がった。とくに「主義」との組み合わせによる多くの新概念の創出が大きな意義を持つ。こうした漢字語訳の中国での受容は日本語の翻訳を通してほぼ同時期に行われたことで新概念の中国での迅速な伝播と普及に大いに寄与されたのが間違いない。その方法を通してこそ、新時代の各種思潮と主義にすぐに接することができ、中国人の世界情勢への適切な把握にも役立ったものであろう。

#### 参 考 文 献

- 金子勝「『帝国主義』概念と世界史」『情況』8-10, 東京：情況出版, 1997年。  
金観濤, 劉青峰『觀念史研究 - 中国現代重要政治術語的形成』, 香港：香港中文  
大学当代中国文化研究中心出版, 2008年。  
惣郷正明, 飛田良文：『明治のことは辞典』, 東京：東京堂出版, 1986年。  
陳力衛「《共産党宣言》的翻譯問題」『二十一世紀』第九十三期, 香港中文大学,  
2006年2月。  
陳力衛「『主義』概念在中国的流行及其泛化」, 上海：『學術月刊』2012年9月。

（本研究は、平成23年度文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（研究拠点形成する研究）として採択された研究プロジェクト、「社会的・文化的な複数性に基づく未来社会の構築に向けたグローバル研究拠点の形成」（平成23年～平成27年）による研究成果の一部である。）